

第2回 多自然地域を後背地とする居住拠点都市の振興 に関する研究会 議事要旨

【開催日時等】

- 開催日時：平成24年11月8日（木）10：00～12：00
- 場 所：総務省7階 省議室
- 出席者：後藤座長、桑野委員、小西委員、沢登委員、藻谷委員、
武居地域力創造審議官、牧地域自立応援課長
オブザーバー：国土交通省国土政策局地方振興課 西野企画専門官

【次第】

- (1) 武居地域力創造審議官 挨拶
- (2) 資料説明
- (3) 意見交換
- (4) 今後のスケジュール等について

【配付資料】

- 資料1 多自然拠点都市圏域の振興について
- 資料2 実証研究の概要
- 資料3 今後のスケジュール（案）

【資料説明】

- 事務局より、配布資料に基づき説明。

【主な意見】

（実態調査の報告、居住に必要な都市機能について）

- 人口が3万人に満たない富良野市の住民は、近接する旭川市の都市機能を利用する機会が比較的多い。北見市は人口が多く、一通りの都市機能が揃っていて拠点性が高いが、国勢調査の基準日である10月1日は農産物の収穫期等であり、周辺の市町村への通勤者が多いこともあって、昼夜間人口比率が1未満となることに影響している可能性がある。
- 個々人にとっての物理的距離を克服する技術は進歩した。一方、多自然地域の抱える社会的な距離を克服する上では、適度な規模の学校、緊急時の病院、匿名性の中で都市的な消費生活を楽しむショッピングモールなどの都市機能が求められている。
- ハードだけではなく、人々のライフスタイルに着目したソフト面の都市機能の充実を図ることも必要。

(都市に住んで多自然地域に通勤するライフスタイルについて)

- 複数の仕事に就いて収入を確保するためには、特定の就業先の近くに住むのではなく、交通の便が良く一定の都市機能が集積する数万人規模の拠点都市に住むほうが便利。
- 都市的な生活を求めて拠点都市に住む人もいれば、多自然地域の豊かな環境の中で住むことに価値を見出す人もいる。都市機能については地域の頑張りによって補完できる部分もあり、多様な価値観やライフスタイルがあっても良いのではないか。

(圏域内の役割分担等について)

- 後背地に就業先があることで、飲食業が繁盛するなど拠点都市にとってもメリットとなることは明らかであるが、相互依存の考え方が十分に認識されていない。圏域全体の発展のためにも、拠点都市と周辺の市町村が協力して機能分担を行う意義を強調すべき。相互依存性がキーワードになる。
- 今や住宅地と就業地の境界が不明確になりつつあり、多自然拠点都市圏域においては逆転現象を起こしている。定住自立圏に準じた制度を構築する際には、「中心」「周辺」という考え方を薄めるような形で、用語の取扱いにも留意すべき。
- 豊かな地域資源を活かした雇用を創出している後背地の存在が、圏域の中で価値観として十分に認められていないのではないか。

(定住自立圏構想との関係、振興策のあり方について)

- 定住自立圏構想は、白地地域を作っても構わないという前提で、中心市要件を昼夜間人口比率1以上に限定した。本事業は、実態としては拠点性があるが、特殊な要因によって定住自立圏の形式要件を満たさない都市を、どのようにカバーするかが出発点であり、定住自立圏に準じる形で対象としてはどうか。
- 都市と農山村地域の相互補完の関係に着目して、両者を一体的な圏域として計画的に扱うことは世界的潮流にある。行政以外の非営利組織などの主体も参加して、一つの生活圏・郷土圏を形成していくことが重要ではないか。